



道産和種馬（どさんこ）余聞

三 股 正 年

四〇年前もの古いことであるが、畜産を

専攻していた学生の頃（一九三八年）、私を含む六名の学生が、助教であった館脇操先生（植物分類学）と松本久喜先生（馬学）の指導で、一カ月の満洲旅行をしたことがある。

当時、鐘紡の津田信吾社長から親交の深かった里正義先生（皮革製造学）と犬飼哲夫先生（動物発生学）に、満洲に建設する牧場予定地の畜産資源調査を依頼してきたので、現地調査班として館脇、松本両先生

の指導する班が編成された。

同行の学生は調査地では、自然植生の野草や棲息する昆虫の採集を主とする生態系の調査であったが、旅行コースの沿線にある公主嶺農事試験場をはじめ、めん羊改良牧場、種牛牧場、種馬所など多くの公共機関の施設見学や先輩の人達にもお目にかかる機会もあり、かつ、満洲の真夏でも乾燥した大気は、いやがうえにも旅行を快適なものにした。

□……□

蒙古馬との出会い

……□

畜産を専攻する学生にとって都市や町村で見かける家畜は、どれもが異様に見える、家畜別に分担した調査報告の材料蒐集に夢中になった。とりわけ満洲の西北部に連なる興安嶺沿いに、ハロンアルシャンからハイラルに広がる草原には遊牧民族の蒙古人が住み、昔ながらの生活様式に身近に接したことは旅行一番の収穫であった。

パオ(包)の近くに燃料にする乾燥固型糞が積まれ、茶や馬乳を好み、携帯を欠かさない食事用の刀で鍋のなかの羊肉を巧みに切りとり、碗と箸とで食事する。ライ麦のパンやバターもつくる。パオのなかには物交したと思われる柱時計やミシンなどの都会用品が、いかにも異和感を漂わせていた。

彼らは男女の別なく乗馬が巧みなのは、この草原では唯一の足だからである。草を求めて家畜群を誘導し、群から離れるものがあれば、素早く追って捕獲棒で捕える早業を難なくこなす。彼らは昔ながらの自然や生活様式を大事にし、唯一の財産である家畜も純粋種を尊び、異血導入を試みる改良には断乎反対するのである。

公主嶺の試験場では、日本人の研究者が乳牛や豚、めん羊など、異血導入による品種改良に力を注いでいた。しかし蒙古人は何百年、何千年つづいてきたであろう自然と暮らしのパターンを変えろことなく、家畜もまた原種の保存を忠実に実行してきている。常食にしている蒙古羊(脂肪尻羊)は、日本人の嗜好からすれば異様な臭いと食味があるが、彼らにとっては最高のものなのである。だから改良すること自体、容認されるところのものではなかった。

ホロンパイル草原で見たこの草原馬が、

北海道に土着する和種馬に大変よく似ていることに気がついた。子供の頃、札幌の市内では冬になると電車線路の除雪作業に多勢の御者と箱馬籠が動員され、市内中央の大通公園は雪捨場になった。雪捨場は恰好のゲレンデになるので、スキー滑りをする子供達のよい遊び場であった。除雪に動員された馬のなかにはベルシュロンのような大型の馬もあれば、道産和種馬のように小型の馬も沢山混じっていた。馬格から見れば大小の差こそあれ、中重量級の荷役は難なくこなしていた。

加茂儀一先生の著書「家畜文化史」によれば、今日の蒙古馬の祖形は中央アジアに野生するブルツェワルスキー馬か、またはその類縁のものであろう。そして、蒙古の草原馬を原始的に家畜化したのは蒙古人であったと述べている。また、日本に最初に来た馬はタルパン(トルコ地方)系統の馬であって、今日この系統である在来種は北海道産和種馬、木曾馬、琉球宮古馬、與那国馬などによって代表されている。

このタルパン系統の馬は、中央アジア、朝鮮を経由して日本に移入されたが、途中で蒙古馬と混血したため、厳密には血液的にやや異なるものをもつという。現存の日本の在来馬は体躯が小さくて細いが、蒙古馬の太くてやや長いのは異なっており、

前者が高原棲息形態であるのに反し、後者は草原棲息形態である。日本のような地勢においては、この高原形態の馬が栄えたのは当然であつたらう、と述べている。

ところで、蒙古馬の最近の消長を紹介する記事が東京学芸大学の市川健夫先生の手で朝日新聞に掲載された。その一節によれば、モンゴルの貨物輸送は、鉄道七五%、自動車二四%に依存しており、馬、牛、ラクダ、ヤクの駄載交通は、もはや昔話になっている。

このように役畜としての馬は、牧畜民族の「管理家畜」としてのほかに利用されていない現状である。騎馬民族の原動力となった馬は、歴史的使命を終えてしまったように見えるが、現実にはモンゴルの馬は、用畜として重要な役割をになっている。一九七四年には人口の二倍に近い二二六万頭の馬が飼育され、三三万頭の子馬が生産されている。馬の経済性が高いのは乳・肉・毛・皮など、その用途がきわめて高いからである。そして馬格については、野生の「モンゴル草原馬」はゴビ地方に棲息し、体高が一三〇センチ以下の小型馬で、「モンゴル馬」は一三〇—一四〇センチの中型馬が多かったという。モンゴル馬が体高に比して体長が長い。これは大腸など消化器官がよく発達しているからで、野草だけでも育

つ強靱な健康を持ち合わせているからである、と述べている。

同系統の血液に由来するアジアの在来馬も、国情がちがうと産業的扱いにも大きなへだたりが感ぜられるが、日本在来種馬についても考えなおしてみる必要性が痛感される。

道産和種馬との再会

一九七六年の夏、私は高知県の山地酪農経営農家を訪ねるため四国に旅行した。私の訪ねた斎藤陽一さんという人は、一〇年前にそれまでつづけてきた水田経営を中止し、南国市の山間部に土地を求め、海拔二五〇メートル、傾斜度一五—四〇度、面積三〇ヘクタールのところにシバ主体の周年放牧で成牛二五頭、育成牛二三頭を飼育し年間一〇〇トン(平均一頭当り四トン)の牛乳生産を挙げている。県下でも有数の酪農家の一人ともなった現在でも、苦斗時代を忘れないために玄米のご飯を食べているという食事を私もいただきながら、彼の辿った山地酪農の経営経過を聞いた。

山地酪農は、未利用のまま放置されている雑木林を、その起伏傾斜する山容のままに草地として牛を放牧しようとするもので、近年新しい経営方式の一つとして僅か

な人達の間ではあるが抬頭し、注目されている酪農経営なのである。

台風襲来の常在地である四国・高知の山で、どのような土地保全対策を考え、そして放牧牛のエネルギーのロスが多い急傾斜地で放牧維持がつづけられているかを見るのが、今回旅行の主目的であった。

私は斎藤さんの案内で斜面を登り降りしながら斜面をおおろノシバ、メヒシバ、エノコログサ、ケンタッキーブルーグラス、レッドトップなどの野草や牧草が、強烈非情な台風襲来から土地を護り、国土保全の役割を果たしている様子に深い感銘をうけた。帰りぎわ、斎藤さんは私に「どさんこの馬が手に入れば、山の牛の見廻りや子供の通学の往復に使いたいのだが、手に入れる方法はないだろうか」と尋ねた。私はその申し出を快くうけ、「札幌に帰ったら調べて情報を送りましょう」と約束した。

私は、私のいまや遠いイメージのものになってしまった道産和種馬に対する郷愁が急によみがえり、四国の純朴で敬虔なクリスチャンである一山地酪農家との約束を、なんとか果たさなくてはとの責任感から、札幌に帰るや直ちに北大農学部馬学教室に八戸芳夫先生を訪ねた。幸いなことに八戸先生は、道産和種馬の消長と現状を詳しく丁寧に教えてくれたばかりか、来年の春、

道南の馬の放牧期に一緒しませんか、とのお誘いまでうけた。

秋、私は函館市役所畜産課内にある北海道和種馬保存協会道南支部と、函館市鱒川町にある道産和種馬の飼育者である土谷福次郎さんを訪ねる機会ができた。八戸先生が紹介してくれたからである。八戸先生の話によれば、土谷さんは現在道南地方での和種馬多頭飼育者で、和種馬調査のよき協力者でもあるという。旧友にでも会うような初対面であったが、四国との約束のことも承知してくれた。そして、斎藤さんの希望する孕みの牝馬にすることも同意してくれた。

土谷さんの先祖は東北の南部の人で、函館に定住して七代目になるという。さきのほうは判らないが、道産和種馬を飼育してきたのは四、五代目頃からつづいていることは確かだというので、私は、土谷さんこそ南部馬の血が流れている本当の道産子だといって笑った。さらに私は、道産和種馬の古い伝説について興味を持っていることを話した。

すなわち、最上徳内の蝦夷草紙（一七九〇年）の一部に「松前所在島一國ハ牛馬ヲ飼テ野放ニカヒ置クナリ。夏ヨリ秋ハ青草枯草モ有テ食用ニ飢セズ、依而眩野眩陸ニ遊ブ、冬ニ至リテ雪ブリツモレバ、雪中ヨ

リ秀ル薄ノ穂ナドヲ喰居ルトイヘドモ極寒ノ頃ニナレバ、雪モ大ニツモリテ、薄ノ穂モ積ル雪ニ埋リテ食物モ絶ケレバ、浜辺ニ出テ遠沖ヨリ波浪ニ打ヨセラレタル海藻ヲ拾ヒ食フ。土人其時ヲ待テ馬ヲ取集テ、雪ノ上ニヤラヒテ結ビ、其内ニ飼置テ草トテ毎秋刈干草ヲ貯ヘ置キタル蓬刈リノ芽ヲ与ヘルナリ。如斯ノ粗末ノ手当ナレドモ馬ノ剛強ナルコト他ニ比類ナシ」と。これに對して土谷さんは、いまでもそのような場面はありますと肯定していた。

一九七七年春、日本馬事協会から「日本在来馬の保存活用に関する調査成績」が刊

行され、この貴重な文獻を北海道和種馬編の著者である八戸先生からいただいた。これには北海道和種馬の起源、分布、体型、能力、利用など経過を含め、一切の全貌が判り易く記載した調査記録である。この記録の末尾に保存の問題点と対策が述べられているが、見逃すことのできない重要な将来問題を示唆している。

- (1) 和種馬飼育の後継者問題
- (2) 放牧地の問題
- (3) 保存地域の設定
- (4) 登録と改良
- (5) 啓蒙と宣伝
- (6) 北方領土問題と和種馬保存がそれである。

農林省の家畜基本調査によれば、一九七六年二月一日現在のわが国の馬資源は、農耕馬、軽種馬合せて八五、六四〇頭、北海道は四九、二六〇頭である。北海道和種馬は、前記八戸先生の文獻によると、明治末期（一九一二年）に九三、三〇〇頭、昭和初期（一九三四年）に四、二二九頭、現在（一九七六年）では僅かに一、〇九五頭を数えるのみになった。まさに、時代の変遷とともに馬の用途が激減した。その分布地域も、全道一円から渡島、日高、釧路、根室にせばまってきた。早晚、減衰の到来を待っているに等しい。

道産和種馬のふるさとである渡島地方においても、飼育の基盤になる山林や草原が心なき企業の手で宅地化され、はたまた観光用猛獣動物園敷地に買取されたりしている。植生分布にも、農業生産にもその存在価値の高いシバ草原が大型機械の耕起で草化されてゆく。つまり、人間が利用度の高い和種馬を自然環境から追い出そうとしている。

自然の恩恵を豊かに求めつづけるモンゴロ民族のように、自然を災害から守り、自然を破壊することなく利用する山地酪農や、和種馬の飼育がなぜできないのかわかるか。

農林省農業構造改善局の調べによると、

わが国の農用地開発可能地が全国で一八九万ヘクタール、北海道だけでも八二万ヘクタールくらいある。もし食糧自給率を高めるためにこれらの地積を開発しようとするなら、よく吟味する必要がある。自然保護のもとに農業生産をあげ、自給率を高める方法をもっと真剣に考えるときなのではなからうか。

□……………

おわりに

……………□

一九七七年十二月、私は四国・高知の斎藤陽一さんからハガキの知らせを受けた。

「函館の土谷さんからの和種馬一頭が、長旅にもかかわらず元気に到着した。短い草を食べるのが上手なので感心した。子供は喜んで馬と遊んでおります」という文面であった。土佐に渡った道産ン子と、これらの人達の幸せを祈らずにはおられない。

(酪農学園大学・教授)